

令和5年度 幼保小連携推進園・校報告書 中筋幼稚園・中筋小学校

1 学校の課題

昨年度、図画工作科への研究の取組から、思いのままに表現することそのものを楽しむことができる児童がいる反面、指示ややり方等、抛り所がなければ、自己の思いを表現することが難しい、また、自由に表現することに不安を感じる等、活動や学習に興味をもち、自分なりに工夫しながら見通しをもって取り組む「主体性」に関する力に課題が見られることが明らかになった。このことは、全国学力・学習状況調査にも顕著にその結果が表れている。知識・技能的な平均正答率は、一定の水準に達しているが、「学習への興味関心」についての項目は、否定的な回答が50%前後見られる。素直に指示に従うことはできるが、思いや目的に合わせて、創意工夫する創造的な力が十分育まれているとは言い難い。

幼稚園においても、身近な物事への興味や関心は高いが、積極的に行動に移すことや自己決定することができにくい姿、自分の思いを十分に表現しきれない姿が見られ、「主体性」に課題がある。

幼保小連携においては、連携園と小学校とで職員同士が連携して研修等をする機会を年に数回設けてきた。また、児童と園児の交流会も年に2回開催し、1・2・5年生と園児が関わりをもっている。様々な連携は継続されているが、お互いの教育活動への理解が十分とは言えない。また、子供の主体的な学びをつなぐための取組を進めていく必要もある。

2 研究主題

主体的に学びに向かう子供の育成

～自ら関わり、感じ、考え、伝え合うことができる保育や授業を目指して～

3 取組内容

(1) 児童・園児の「主体性」を育む取組

研究主題に迫るために、小学校では、研究の柱を「道徳科」に置き、実践に取り組んだ。『主体的に活動に関わることができる力』を伸ばすために、まずは子供たちが道徳授業へ意欲的に参加する姿を目指した。その方策として、『自分の立場を明確にし、理由を添えて意見を述べることができる』よう実践を重ね、年に各3回の校内全体研修会、ブロック研修会を通して、授業づくりの工夫改善について研修を重ねた。

幼稚園では、研究の柱を「主体性を育む環境の工夫・仕掛け」とし、週に3回程度、日々の保育を振り返った。子供の姿から、その姿が見られた要因を探り、次の日の遊びに向けての環境構成や方向性などを検討した。

(2) 発達のつながりや各々の教育活動への理解に向けての取組

○互いの教育について理解する

幼稚園教諭が、小学校の授業研究会に参加した。授業後の協議会にも参加し、授業づくりの意図や展開のねらいを知り、子供たちの学びが深まる要因等について理解をしていった。また、小学校教諭は、幼稚園の保育を参観した。その際、小学校教諭が幼児の学びを見取ることは難しいと考え、園に行こう週間開始前に「幼児の姿見取りシート」を配付し、幼児の学びやその学びの見取り方を提案した。

〈提案内容〉

- ・幼児は、遊びを通して総合的に学んでいる。
- ・保育者は、幼児の育ちを見るときに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点にしている。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、到達目標や幼児期に必ず育てなければならないものではない。

○夏季合同研修を開催

広島大学大学院，中坪 史典先生を講師に招いて幼稚園と小学校とで合同研修会を開いた。幼児教育の重要性や幼児教育と小学校教育とで障壁となっているものについて理解を深めた。また，幼稚園・小学校では，教育方法等に違いはあるが，目指す資質・能力はつながっていることを共通認識した。

○幼保小連携「学びの架け橋通信」の作成・配付

幼児の日々の遊びの様子，また，その遊びの中にどのような学びや育ちがあるのかを，10の姿を手掛かりにまとめ，連携園と小学校教諭に配付した。

○交流の充実

これまでの連携を継続させると共に，新たに交流可能な行事を検討し，積極的に取り入れた。

これまでの交流	今年度から始めた交流
<ul style="list-style-type: none"> ・年に3回の幼保小連携推進事業 ・園に行こう週間 ・年に2回の保育者と1年担連携の会 ・2年生との交流 ・1年生・5年生との交流 ・給食試食会 	<ul style="list-style-type: none"> ・2年生 生活科 「町が大すき たんけんたい」幼稚園訪問 ・園児 小学校のプール活用 ・合同避難訓練 ・園児 運動会の表現見学 ・園児 中筋ゲームワールド参加 (感染症予防のため参加取り止め)



(3) 連携から接続へと発展させるための取組

「滑らかな接続」とは，園児が小学校入学に伴い感じる精神的なハードルを低くしていくことである。また，連携を充実させた上で，「育みたい資質能力」（知識及び技能の基礎・思考力，判断力，表現力等の基礎・学びに向かう力，人間性等）から「育むべき資質能力」（知識及び技能・思考力，判断力，表現力等・学びに向かう力，人間性等）へとつなぐことでもある。「学びをつなぐ接続」となるように取り組んだ。

○スタートカリキュラム

- ・あやとりや絵本の貸し出し、マンダラ塗り絵の設置

園で慣れ親しんだ遊び道具があると，友達と関わって遊ぶ機会を増やすことにつながる。当時のことを思い出して話をしたり共通の思い出を語ったりすることで，つながりを実感し，安心感を育むことをねらいとした。

- ・「先生となかよし」を企画

小学校教諭や連携園の保育者に，朝15分程度，自己紹介や絵本の読み聞かせ，園で慣れ親しんだ手遊び等をしてもらう時間をつくった。楽しい時間を過ごすことで，慣れない小学校生活による緊張感を解きほぐすことや，懐かしい思い出を共有することで，安心感をもち，改めて前向きな気持ちをもって生活が送れるようにすることをねらいとした。

○「連携園・小学校接続会議」の開催

〈接続会議のねらい〉

- ・幼児教育と小学校教育の双方を知ることにより学び合う。
- ・連携園同士や連携園と小学校がつながることで，連携と接続の充実を図る。
- ・連携と接続を充実させることにより，保育の質向上，小学校の授業改善へとつなぐ。

参加者は，基本的には，連携園からは年長担任，小学校からは1年生の保幼小担当者と派遣教員とした。連携園同士，連携園と小学校がつながることは，連携から接続へと発展させていく上で欠かせない。保育者と小学校教諭が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに，率直な意見交換を行ったり，接続カリキュラム（アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム）について共通認識を図ったりした。

4 検証結果

(1) 「主体性」に関する意識調査

小学校

表1 「自分の気持ちや考えたことを、理由もあわせて伝えることができましたか」※(児童回答)

4：よくあてはまる 3：ややあてはまる 2：あまりあてはまらない 1：まったくあてはまらない

	1回目(6月)				3回目(1月)			
	4	3	2	1	4	3	2	1
1年生	47%	36%	13%	5%	44%	34%	19%	3%
2年生	40%	39%	20%	2%	27%	43%	21%	9%
3年生	40%	30%	25%	5%	40%	35%	20%	5%
4年生	38%	43%	15%	4%	42%	40%	17%	1%
5年生	49%	29%	19%	2%	35%	45%	19%	1%
6年生	42%	33%	22%	2%	31%	47%	20%	2%

※本年度は、研究1年次のため、児童の積極的な授業参加(対話・話し合いを通して、一人一人が気付いたり考えたりしたことを、表現したり振り返ったりする姿等)を「主体性」と捉えた。「自分の気持ちや考えたことを、理由もあわせて伝えることができましたか」という質問項目により、「主体性」の育ちを検証することとした。

〈結果〉1・2年生においては、否定的評価が増加した。3年生～6年生においては、肯定的評価が微増した。

低学年では、記述ができるように観点を示してはいるが、形式的な面があるため、型にそって書くことへの抵抗感が増したことが考えられる。また、日常から日記や作文指導等で、事象や気持ちを文章化する経験を積み重ねておくことも課題として考えられた。逆に、高学年については、話し合いの回数が増えることで、学習体験を共有できたことが、児童の自信や経験につながり、積極的に自分の意見を記述したり発言したりと、学習への参加意欲が高まったことが要因として考えられる。

幼稚園

表2 「自分でやりたい遊びを見つけて主体的に遊ぶことができるようになってきているか」(教師回答)

A：そう思う B：ややそう思う C：あまり思わない D：思わない

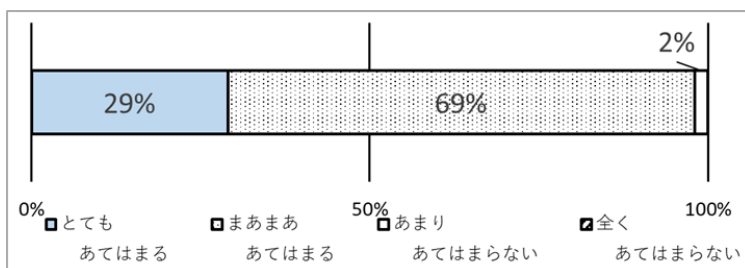
	1回目(7月)				3回目(1月)			
	A	B	C	D	A	B	C	D
4歳児	14%	43%	43%	0%	33%	67%	0%	0%
5歳児	21%	50%	29%	0%	50%	50%	0%	0%

〈結果〉4歳児・5歳児共に、肯定的評価が増加した。

(2) 発達につながりや各々の教育活動への理解に関する意識調査

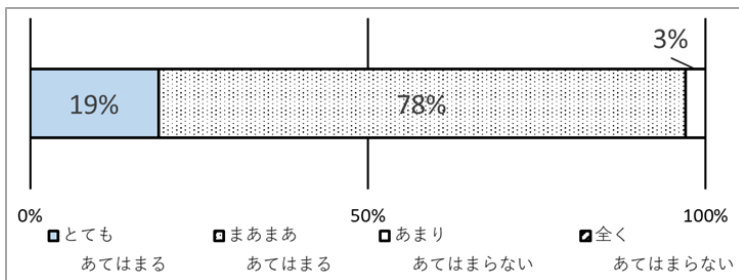
グラフ1 これまでと比べた「幼児期の学び」や「小学校教育」についての理解

(幼稚園教諭・小学校教諭回答)



〈結果〉98%が肯定的評価を示しており、幼稚園教諭・小学校教諭共に互いの教育への理解が進んだ。

グラフ2 「幼児期の終わりまでに育みたい幼児の姿」についての理解 (小学校教諭回答)



〈結果〉97%が肯定的評価を示しているが、「とてもあてはまる」と回答した教員は19%にとどまっている。

5 研究成果

(1) 児童・園児の「主体性」を育む取組

小学校では今年度、『主体的に活動に関わることができる力』を伸ばすために、児童が道徳授業へ意欲的に参加する姿を目指して取り組んだ。その方策として、『自分の立場を明確にし、理由を添えて意見を述べることができる』よう指導を焦点化した。その際、全校で道徳ノートを用い、書くことを通して、自分の気持ちや考えにしっかり向き合い、理由も含めて表現する習慣づくりを進めた。多くの児童が、ノートに意見を書くだけでなく、友達とのやりとりを書き残したり自己の変容に気付いたりすることもできていた。しかしながら、主体性に係る児童アンケートからは、十分な成果が得られたとは言い難い。書いたことを基にやりとりを進め、自己の考えを見直したり、新たな考え方の良さを実感したりして、道徳的な実践意欲をより高めていくことへつないでいくことが課題である。

幼稚園では、「自分でやりたい遊びを見つけて主体的に遊ぶ事ができるようになっているか」という質問項目に、個々の遊びの様子や育ちを理解している担任が中心となって回答した。4歳児・5歳児共に、「主体性」が伸びていると肯定的な見取りをしている。その要因として、遊びの後に振り返り時間を設け、一人一人を認めて自己肯定感をもてるようにしたことや、職員が日々保育を振り返り、次の日に自らやりたくなるような環境を構成したこと等が考えられる。

(2) 発達のつながりや各々の教育活動への理解に向けての取組

グラフ1を見ると、互いの教育への理解について、98%が肯定的評価を示している。「幼保小連携推進園・校」となったことにより、幼稚園教諭・小学校教諭共に、これまでより互いの教育への理解が格段に進んだと考える。幼稚園教諭からは、日々の保育において「ねらい」を明確にすることの大切さに気付いたという意見等があった。小学校教諭からは、保育参観することにより、日々の自分の指導を振り返ったり、関わり方を考え直したりしたという意見が多かった。また、グラフ2を見ると「幼児期の終わりまでに育みたい幼児の姿」についての理解が97%を示しており、保育参観や合同研修などの成果が伺える。しかしながら、「とてもあてはまる」と回答した教員は19%にとどまっており、幼児の「学び」についての理解は、来年度の課題である。

(3) 連携から接続へと発展させるための取組

例年のスタートカリキュラムに加え、あやとりや絵本の貸し出し、マンダラ塗り絵を配置したことや「先生となかよし」を企画したことは、入学当初の1年生への安心感につながったと考える。1年生担任からは、「朝学校に来てからや、休憩時間などによくあやとりをして遊んでいる」という声を聞いた。また、「先生となかよし」については、「普段は、学校生活に難しさを感じている子が、ニコニコしながら手遊びをしている姿を見ることができた」「保育者と小学校教諭が、教室内で一緒に過ごしている空間が、1年生の児童の安心感につながると思う」等の感想があった。

今年度から始めた「連携園・小学校接続会議」については、連携園同士のつながりを深めたり連携園と小学校との接続を滑らかにしたりする上では、一歩前進したと考える。今後は、子供の姿を共有し、滑らかな接続となるよう接続カリキュラム（アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム）の内容を工夫・改善することが必要である。